

2023 年度 学校評価報告書

(自己評価・授業評価・学校関係者評価及び次年度方針)

2024年3月31日

大阪信愛学院小学校

学校評価委員会

2023年度 学校評価報告書

(自己評価・授業評価・学校関係者評価及び次年度方針)

はじめに

「学校教育法」「学校教育法施行細則」に基づき、2023年度に実施した「学校評価」の内容をご報告いたします。

1. 建学の精神

「キリストに信頼し、愛の実践に生きる」

1877年(明治10年)、フランスから派遣された4人のシスターたちは、町の中にすてられた子ども達を養育することから事業を始めた。それは、「隣人を自分のように愛しなさい・」というキリスト教的精神の表れであった。その精神に従い、弱い者、困っている者、傷ついている者に手を差し伸べるという行為を実践した。

1884年(明治17年)、大阪の川口居留地に最初の女学校が創立された。信愛学院に集う児童たちが建学の精神を体現し、社会に貢献できる人間になること、そして愛と奉仕の精神を持った人間となるような教育を実践することを目指す。

2. 教育目標

カトリック精神に基づく世界観をもたせ、豊かな心を養うとともに、物事を正しく判断して行動し、すすんで国際社会に奉仕できる明朗で健康な人を育てることを目指す。

- (1) 創立者と建学の精神についての理解を深める。
- (2) 生活態度を磨き、社会における実践力を身につけさせる。
- (3) 強い身体と豊かな心を育む。
- (4) 基礎学力の定着と向上を図る。
- (5) グローバル化する社会に対応できる力をつける。

3. 学校目標

- (1) 魅力ある信愛教育を追求する。
- (2) 児童が持つ能力を最大限に伸ばす。
- (3) ICT 機器を効果的に活用した授業を展開する。
- (4) 募集・広報活動の拡張・充実を図る。

4. 2023年度（令和5年度）学校目標と具体的方策及び評価指標

	今年度の重点目標	具体的な取組計画	評価指標
魅力ある信 愛教育を追 求する。	聖書の言葉にふれさせる。	毎月のみことばを唱え、自分の生活をふり返る。	みことばを身近なものとしてとらえ、毎日の生活にいかそうとする。
	感謝と思いやりの心を養う。	「神様が、人が、そして自分が好き」という思いを育てる。	お互いの長所、短所を理解し、自分も友達も大切にできる。
生活態度を 磨き実践力 をつける。	元気な挨拶や返事を励行する。	先生から児童へ、児童から先生へ、児童同士が元気な挨拶をするよう意識づける。	先生や友達、来校者に進んで挨拶ができる。
強い身体と 豊かな心を 育む。	基本的な礼儀作法や正しい姿勢を励行する。	正しい姿勢で、授業の開始と終了の挨拶をするよう意識づけをする。	休み時間と授業の区別をつけ、集中して学習に臨む姿勢を育てる。
		マナーを守り、安全に登下校できるように指導する。	集団下校を通し、縦割りでマナーを守り、安全に登下校する。
	あきらめず最後までやり通す心を養う。	放課後などの時間を活用し、あきらめず最後まで課題をやり通すよう支援する。	学習で「わからない」をそのままにせず、「わかった」と思えるまで取り組む姿勢を養う。
基礎学力の 定着と向上 をはかる。	自ら考える姿勢を育む。	新しい学習に対し、主体的に自分の知識を活用し、考えたり調べたりする習慣を身につけさせる。	日々の授業・放課後学習・土曜講座・パワーアップ学習などを通して、ひらめき・やる気・可能性を引き出す。
	効果的にICT機器を活用した授業を展開する。	ICT機器を活用し互いに意見をかわし、それぞれの考えを深める。	タブレットを使った効果的な授業の研究をする。
グローバル 社会で求め られる力をつ ける。	進んで英語学習に取り組む姿勢を養う。	英語の課題に、楽しんで取り組む姿勢を養う。	毎日の家庭学習に英語学習を取り入れ、リスニング力を養う。
	異なる考えを柔軟に受け入れる心を育てる。	わがままをおさえ、友達の意見を最後まできけるように導く。	日々の学校生活の中で、何がわがままなのかを伝え、相手の立場になって考えられる児童に育てる。
募集行事・ 広報活動の 充実をはか る。	入試関連行事の充実をはかる。	オープンスクール、入試説明会の充実をはかる。	本校を理解し、入学希望者が増えるよう、それぞれの時期に適切な内容のオープンスクールを実施する。
	ホームページを効果的に活用する。	ホームページのブログによる発信の充実をはかる。	ホームページのブログを利用し、日々の学校生活の様子を伝える。

5. 学校関係者評価委員会

(1) 構成

教育会代表（会長・副会長）・小学校顧問・小学校卒業生代表・小学校関係者代表（校長・教頭・教務主任・担当者）

(2) 開催

2024年9月5日 10:30～12:00

(3) 評価のための資料

自己評価の結果、およびアンケート結果の分析資料

(4) 学校関係者評価委員会のまとめ

9月5日に行われた学校関係者評価委員会において、アンケート調査の結果とその分析が行われた。教育会代表の二人の委員によって指摘されたことは、次のとおりである。

創立者と建学の精神について理解を深めるという目標については、祈りの習慣を身につけることによって、1年生児童の家庭においてもその祈りを唱えるなどの変化がみられるようになり、高く評価している保護者が複数いるということが指摘された。この点については新入生や低学年だけではなく、高学年になっても継続していくような教育をしてほしいという要求がなされた。

また、生活習慣や生活態度を身につけ、社会に適応するという点については、児童たちの自主的な活動が高く評価されていた。朝礼や昼食時の放送、そして終礼において、児童会の役員たちによる呼びかけが重要であり、今後も児童の自主的な活動を教員が促しつつ、見守ってほしいとのことであつた。そして、時間数的には少ないものの、各学年の作法の授業の重要性を保護者に対してしっかりと発信していくことも大切ではないかと指摘された。一部の保護者からは、その重要性に対して疑問符を投げかけられることもあり、その点については教職員側の今後の情報発信をすることによって、学校と保護者との共通理解を形成するとともに、信愛学院小学校の一つの伝統としていかなばならないという点で教育会と教職員側との意見が一致した。

英語教育とICT教育については、アンケート結果から見ると全体的には高評価ではあるが、「よくあてはまる」の比率を上昇させるために、実践的な要素を今以上に導入し、児童と保護者の両社が満足するレベルに高める必要があるのではないかと指摘があつた。

自己評価する際に、アンケート結果よりも厳しい判断をしていることが多い。甘い自己評価になることは問題であるが、正しく評価した結果、高評価になるのであればそれはむしろアピールしてよいのではないかとということが指摘された。

目立った指摘や議論となったのは以上のような点である。これらの指摘、議論を踏まえて、来年度の改善点や具体的な取組を熟考し、来年度の計画とした。

6. 2023年度（令和5年度）アンケート調査の結果と自己評価及び次年度の課題と改善策									
					アンケート調査の結果（％）				
					よくあてはまる	ややあてはまる	あまりあてはまらない	全くあてはまらない	
1. 教育目標について					40	50	10	0	自己評価
創立者と建学の精神についての理解を深める									
具体的な取組計画									
毎日の朝礼で行う祈りを通じて、自ら祈る心と祈る習慣を身につけさせる。									
活動状況と自己評価					40	50	10	0	B+
新入生は戸惑いつつも上級生を見習い、主の祈り、アヴェ・マリアの祈りを覚え、祈りの習慣を身につけることが出来た。									
宗教の時間には、シスターたちによって創立者とその学院初期の活動についての授業をきくことが出来、少しずつ理解を深めることが出来た。									
次年度の課題と改善策									
今年度引き続き、次年度も宗教の時間と毎日の朝礼での祈りを大切にし、建学の精神の理解を深める。									
生活態度を磨き、社会における実践力を身につける									
具体的な取組計画					36	57	7	0	B
教師から児童へ、児童から教師へ、児童同士が元気な挨拶をするよう意識づける。									
活動状況と自己評価									
校長が児童登校時に先頭立って挨拶運動を展開し、また、児童会が中心となり、朝の挨拶運動を学年クラスを巻き込んで展開した。その結果、学年による差はあるものの多くの児童が運動に参加し、しっかりと挨拶を励行する習慣が身につき始めた。									
次年度の課題と改善策									
来年度も校長の朝の挨拶運動を継続し、児童たちが自ら挨拶運動があるかないにかかわらずいつ、誰にでもその場に適した挨拶がしっかりと出来るようになることを目標とする。									
社会での基本的マナー、礼儀を身につけさせる					43	57	0	0	B+
具体的な取組計画									
正しい姿勢での挨拶を励行することの意識づけと、マナーを守ることの社会における重要性を意識させる。									
活動状況と自己評価									
各学年「作法」の授業を中心に、社会のマナーとしての礼儀を身につけることが本校、の特色の一つであり、一人ひとりがマナーを身につける努力をすることが出来た。									
次年度の課題と改善策									
激変する日本の社会状況に対応するためのマナーを身につけるとともに、現代社会での礼儀の重要性をしっかりと認識させる。いわゆる礼儀作法を越えて、ICT社会でのルールやマナーについても取り上げていくことが必要である。									
強い身体と豊かな心を育む					29	57	14	0	B
具体的な取組計画									
運動会や遠足といった行事を中心に体力の向上を目指す。									
また、心の面に関しては読書習慣を身につけることにより、多様性を受け入れることが出来るような心を育てる。									
活動状況と自己評価					29	57	14	0	B
運動会の練習で児童たちはしっかりと運動し、体力の強化ができたようである。しかし、一部の児童の中には、練習中に足をねんざしたり、転んでけがをする者が散見された。基本的な体力の強化は、学校の授業や行事だけでは不十分であり、家庭での強化が必要であるように感じた。塾などの学校以外の勉強に時間がとられ、体を鍛えるための時間が取れない状況を変えていく必要があると感じられた。									
読書習慣に関しては、図書館学習の時間を楽しむ児童も多く、いろいろな書物を読むことにより、様々な出会いを実感しつつ、自らの心の糧と出来たようである。この習慣を続けていくことで、人間性の豊かさや人格的成長が見込めると感じられた。									
次年度の課題と改善策									
家庭においても児童と保護者とが何らかのスポーツをともに楽しむような形で体力の強化に関わりを持つよう、協力を求める必要がある。									
読書習慣については各教科と連携し、児童たちへの推薦図書をリスト化し、様々な教師からの推薦図書リストを作成し、より多くの考え方や思想に触れることが出来るような環境を作ることが必要である。									

基礎学力の定着と向上を図る															
具体的な取組計画										14	79	7	0	B	
新しい学習内容に対し、主体的に自分の能力を活用し、熟考することや不明なことについては調べることの習慣を身につけさせる。															
活動状況と自己評価															
不明な点について自主的に調べる習慣がまだ十分に身につけていない。今後は、辞書を用いたり図書館で調べるという習慣を身につけるように指導する必要がある。															
また、基礎学力定着のためのICT機器の利用が十分ではなく、モノグサ等の利用をもっと促す必要がある。															
次年度の課題と改善策															
図書館学習によって読書習慣は多くの児童に定着してきた。今後はこの図書館学習を、何かの課題を与えて調べ学習へと発展させ、知らないことを自分で調べてわかったときの達成感を児童が得られるような形で行うことが望まれる。															
グローバル化する社会に対応できる力をつける															
具体的な取組計画										36	57	7	0	B	
英語はコミュニケーションツールという理解のもとに、英語でのコミュニケーションを楽しむ姿勢を身につけさせる。															
他者の意見を最後まで聞くことのできる姿勢を養う。															
活動状況と自己評価															
中学校の留学生との交流会やイングリッシュキャンプを通じて、児童たちは英語によるコミュニケーションに対して日本文化独特の壁を少しずつ超え始めていると感じられる。また、学習発表会の英語劇の練習においても、楽しんで取り組む姿が見られた。他者の意見を聞こうとする姿勢も、日本語ではないコミュニケーションにおいては集中して相手の話を聞くということが必要であるため、児童にとっては聞く態度が自然と身につく、一定の教育効果が見られた。															
次年度の課題と改善策															
次年度は今年度よりも多くの外国人との直接的なコミュニケーションをとる機会を児童たちに与え、英語を学ぶことの楽しさを知ることが出来るような授業展開を考えていくことで児童の対応力向上につなげるようにが必要である。															
さらに、英語を学ぶことによって欧米文化、思想の理解を深めるような授業内容とする															
2. 学校目標について										アンケート調査の結果（％）					
魅力ある信愛教育を追求する。										よくあてはまる	ややあてはまる	あまりあてはまらない	全くあてはまらない	自己評価	
具体的な取組計画															
毎月に聖書の言葉を定め 毎朝それを唱え、一日の始まりとする。										29	64	7	0	B	
「神様が、人が、そして自分が好き」という思いを育てる。															
活動状況と自己評価															
毎日の朝礼では「今月のみことば」として全員でみことばを唱えることを実践した。児童たちは月が替わり唱える箇所が変わっても、すぐに暗唱できるようになるものが多くいた。自然に聖書の言葉を覚え、やがては児童たちの心の糧となることが期待できる。みことばの中に記されているキリスト教の中心としての愛の精神を理解し、すべての人が神に愛されており、そのような自分と他者とは神にとって同じように大切な存在であることに高学年の児童は気づき始めていたが、低学年においては気づく児童は少なく、今後の宗教の時間で工夫が求められる。															
次年度の課題と改善策															
次年度も毎日の朝礼でこの習慣を継続し、現在より少し長いみ言葉を選び聖書への関心を高めていきたい。特に低学年の児童にはビジュアルな素材を利用した宗教の授業を展開し、直感的な理解を促すようにしていきたい。ビジュアル素材はそれほど多いわけではないが、高額なものも多く、日頃からの資料収集のための予算を計上する必要があると考えられる。															

児童が持つ能力を最大限に伸ばす。										
具体的な取組計画										
教科教育だけではなく、行事や休み時間を通じて一人ひとりの能力が発揮されるように、教職員全員で一人ひとりの児童と積極的に関わる。										
活動状況と自己評価										
全学年を通じて、授業時間だけではなく教員は児童たちと積極的に関わる姿が見られた。本校教職員の自己犠牲をいとわない指導は、他校と比較しても高いレベルで行われている。今後も、授業時間であるかどうかにかかわらず、児童たちと触れ合う時間をできるだけ持つことで、児童の中にある様々な能力を引き出すことに意識を持ち、日々の努力を継続していきたい。						36	57	7	0	B
次年度の課題と改善策										
時代の変化により、児童のニーズも変化し、多様化している。その変化を常に意識しつつこれまでの積極的に児童にかかわろうとする態度を継続していくことが重要である。改善というよりも、現状の努力を維持継続することが求められる。										
ICT機器を効果的に活用した授業を展開する。										
具体的な取組計画										
学年や教科によってどのような場面や教材でICT機器の利用をしたかということを共有し、今後の授業展開に反映させていく。										
活動状況と自己評価										
4年生以上では一人1台タブレットを所有しており、授業内ではかなり有効に使用できるようになった。教員がタブレットの利用に慣れてきたことと、児童たちも慣れてきたことによって、今後の利用方法はさらに有意義なものとなっていくと感じられた。 他方、低学年においては学校のPCやタブレットを共有する形での利用となるため、4年生以上の学年と比べると、十分な形での授業への導入は困難な状況である。教員がタブレットを用いて、図や写真などをホワイトボードに写すだけの利用となっている。低学年でのICT機器の利用については再考の必要がある。						14	72	14	0	B
次年度の課題と改善策										
保護者への負担を考えると、現状のように積み立てをして4年生で導入とするのが無理のない導入方法である。ソフトや機器の更新などを考えても、4年生から6年生までの3年間の使用が無理のない形だと考えられる。低学年においては、もう少し安価な端末を（ゲーム機のように比較的安価であり、教育にも使える端末）を導入することも検討することが必要かと考えられる。										
募集・広報活動の拡張・充実を図る。										
具体的な取組計画										
オープンスクール、入試説明会の充実を図る。										
活動状況と自己評価										
これまでの私学展や説明会に加えて、今年度より「ミニ学校見学会」を計画、実施した。「ミニ学校見学会」は日頃の児童の姿を見ることが出来、私学展や塾主催の説明会では伝えられないところを十分に保護者に伝えることが出来た。ミニ学校見学会は午前の部と午後の部の一日2回制とし、それぞれ5人を上限に申込制で行った。保護者からの評価も高く、すぐに5人枠は埋まり、有効な募集・広報活動であることが分かった。						50	50	0	0	B+
次年度の課題と改善策										
今年度も「ミニ学校見学会」を継続し、現在校長対応となっているが、すべての教員が担当することが出来るように準備し、時期などを定めず、いつでも対応できる形のものとした。児童の日常の姿を見て信愛教育の一端に触れることで、本校への入学意思も強くなると考えられる。 また、実際に本校に足を運ぶことで、ミッションスクールとしての雰囲気やキリスト教に触れることもでき、本校の教育理念をしっかりと理解することにもつながる。保護者の理解が深まれば、児童の入学にも積極的になることは想像に難くない。										